

私達の暮らしとグローバルゼーション

龍谷大学付属平安中学校・高等学校 佐々木潤子

1 はじめに

TPP (Trans-Pacific Strategic Economic Partnership Agreement = 環太平洋戦略的経済連携協定) とは、環太平洋地域の国々による経済の自由化を目的とした多角的な経済連携協定のことである。

今回の実践では TPP に関する様々な意見を知るとともに、日本が TPP に参加することにより、私達の暮らしがどのように変化するのか、生徒自身が考えることをねらいとした実践を報告する。

実践を通して、生徒達に商品を購入することにより、その商品の裏側にある生産や流通を支えている (= システムを維持し拡大) ことに気づかせ、消費行動が持つ意味を自覚させたいと考え、授業を組立てている。

参加型のワーク「ぐるぐるミーティング」と「花はじきで意志決定」を通し、それぞれの立場について理解すると共に、TPP について俯瞰的に理解し自由貿易へ移行していくことの意味を構造的に理解できるように工夫した。

2 指導学年

高校 1 年：食料自給率と関連させ 2 時間で実施

キーワード

参加型学習、重み付けによる意思決定、消費行動、多様な価値観、食料主権

3 実践の流れ

(1) ぐるぐるミーティング

1 クラスを 10 班（1 班は 3～4 人）に分け、TPP に対して立場の違う人物を振り分ける。

（人物の設定は農家の谷さん、証券会社で働く大井さん、部品メーカーの社長平さん、医師の安田さん、生物多様性を守る NGO 団体の高田さん、元総理大臣の山川さん、消費者の下中さん・中屋さん、メダカの学くん、就職活動中の未来さん） ※下記は 4 人の例を抜粋したもの

例 1：農業を営む谷さん

日本が TPP に参加したら価格競争に負けて、日本の農業がつぶれてしまう。物価の高い日本では人件費など農作物を作るためにはコストがかかるのは当然で、競争力がないと言われてもその国々の事情がある。小農、高齢化が今の日本の農業の課題であるのはよくわかっているが、日本の農業は急には変わらない。日本は遺伝子組み換え食品に表示を義務づけているが、それをアメリカに「貿易障壁」だと非難される可能性がある。TPP に参加してしまうと消費者の選ぶ権利も脅かされることになる。価格が安い、高いという物差しだけではない部分も見ていかないといけないのではないか。安全・安心を支えるのは自国の農家というのが基本だと思う。

例 2：消費者下中さん

リストラにならないまでも、現在の勤務先の経営は本当に厳しいところにきている。切り詰められるところはギリギリまで切り詰めているのが、中小の企業の実態ではないだろうか。そんな中、家庭も支出を切り詰めていくのは当たり前。同じものであれば少しでも安いものを購入するようにしている。1988 年の牛肉・オレンジの自由化により、安い牛丼などが提供されていると思う。

日本の農家のことを考えると気の毒に思うが、消費者の立場からすると TPP は歓迎すべき条約だと思う。

例 3：消費者中屋さん

消費者が安全・安心を捨ててまで安さに飛びつくのはどうかと思う。自分が商品を購入するということは、その商品の裏側にある生産や流通を支えることにもなる。

消費行動も場合によっては政治的選択の一票を投じるのと同じだということを知るべきである。これからの消費者は、「不安なものはたとえ値段が安くても買わない」と訴えていくことが大切ではないか。安ければ安いにこしたことはないが、なぜ安いのかということを知る、「自覚的消費者」の立場で TPP の問題を考えていく必要がある。また次世代に向けての新しい消費者教育のあり方を考えていくべきである。

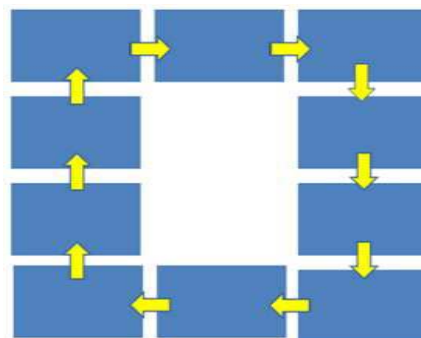
各班に台詞を配布し台詞の中に読めない漢字や意味がわからないところがないか確認させ、グループ内で台詞の中のどのキーワードが重要であるか、どのように台詞を伝えたら聞いている人に伝わりやすいかを考えさせている（＝役作りをさせる）。

また授業では、自分が演じている役割について、その人の発言の背後にあるものについても類推し、役割について理解を深めることができるように意識させた。

(2) 移動（ぐるぐる）の方法

各班で「移動する人」と「残る人」に役割を決めさせる。

教員の合図で「移動する人」になった約半数の人は隣のテーブルに移動する。移動後「移動してきた人側」が2分間 TPP についての意見を述べる。次にそれぞれのテーブルに「残っていた人側」が2分間意見を述べる。聞く側になった時は記録用紙にメモを取るように指示しておく。2分間×2回が終了したら、また教員の合図で「移動する人」が隣のテーブルに移動する。



移動の例

2時間の授業で実施しているため、授業では全部のグループがそれぞれの班をまわることはできていない。5・6回程度移動を繰り返した後、「移動していた人」は元の班に戻り、「移動していた人」「残っていた人」相互に記録用紙を使い、聞き取ってきたことを伝え合う。

(3) 花はじきで意志決定

花はじきとは、ごっこ遊びなどで使われる直径 1.8cm のおはじきのことである。この花はじきを生徒一人につき 10 個配り、それぞれの登場人物のどの意見に共感できるか、プリントの上に花はじきを置くことで投票をさせた。生徒自身の意見に何個置くかを考える中で自分は何に価値を置くのか、自分の中で重要視する項目は何なのかを明確にすることができる（＝多様な価値観を相対化し再統合するプロセス）。



花はじきを置いた例

また、グループで花はじきを置くことで、他の生徒がどのような意見を持っているのか価値基準を可視化することができ、他者との比較がしやすく、グループ内での意見交換が活発化した。横の合計をすれば、班でどの意見に共感できたのか集計することができる。

最後に、班の集計結果を黒板に書かせ、クラス全体の傾向を出し、クラス全体で共有し、それをみて気がついたこと等をまとめさせた。

どのクラスでも花はじきが集まるのはメダカの学くんで、授業の感想でも『外国産の米がたくさん日本へ輸入されると、日本の米は売れず作られなくなってしまうかもしれない。そうすると田んぼがなくなり、その田んぼに住むメダカなどの生物も住む場所がなくなって死んでしまう可能性だってある。何か一つの事が変わるとすべての事が変わってしまう。』などメダカの学くんについての感想が数多く見られた。メダカの学くんを登場させることで人間以外の視点に気づかせることができ、人間を含む環境と TPP についても考えることができるようになったようだ。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	合計
メダカ	3	5	3	1	2	12	0	7	9	52
田んぼ	1	0	1	1	0	5	1	0	2	11
外国産米	2	1	0	1	1	2	3	2	12	24
日本産米	1	4	6	7	3	6	1	1	5	34
環境	5	4	1	1	0	2	3	1	0	17
その他	2	0	1	7	1	1	1	6	3	22
合計	4	2	9	4	10	1	1	2	4	37
その他	0	0	5	2	0	4	5	0	0	26
合計	1	7	6	10	14	5	3	12	9	80
合計	3	6	7	1	10	1	5	8	4	49

黒板にまとめた例

4 生徒の感想

授業後は出てきた生徒達の意見を教師が集約する形でプリントにまとめ、生徒にフィードバックし、そこからさらに学習が深まるように意識している。

(以下は生徒達の感想)

TPP についての意見はどちらから見た視点なのかでいろいろ変わっていた。例えば会社の側から見れば、人の移動が自由になり労働力が手に入るというメリットが、農家の側から見ると外国の作物の輸入は死活問題になる。不況の中、なんとか経済を上向きにしようとするのはわかるが、自分たちの守ってきた伝統や文化のあり方をなくしてしまうという事態になりかねない。ある意味、今の伝統や文化のあり方と未来の方向性をためられているのかと思う。今回やったディスカッションはいい試みだと思うので、将来こういう機会が取れたらと思う。(女子生徒)

最初 TPP を聞いたときは消費者と農家しか関係ないと思ってたけど、いろいろな班の話を見ると医療などにも関係してくることがわかった。外国産の米がたくさん日本へ輸入されると、日本の米は売れず作られなくなってしまうかもしれない。そうすると田んぼがなくなり、その田んぼに住むメダカなど生物も住む場所がなくなって死んでしまう可能性だってある。何か一つの事が変わるとすべての事が変わってしまう。そうならないためにも TPP に参加して悪い方向へならないようにしてほしい。(男子生徒)

TPP の締結によって、日本や世界全体が大きく変わっていくことは明らかです。良い面、悪い面が多くあって、実際に TPP を締結されて始まってみなければわからないという面も多くあると思います。だから、ここで TPP が反対か賛成かを言うことは、私にはできません。

TPP はまだ未熟な部分も多くあり、それを整える必要があると感じます。例えば人の移動を自由にする事で日本に低賃金の労働者が多く入ってくるというのは、日本人の働く場所がなくなるのも大きな問題ですが、それよりも一つの場所に技術が集中することの方が問題だと思います。確かに一つの場所に集中した方が発展しやすいですが、それでは国同士の格差をさらに生むことになります。もっとよく考えていくべきだと思います。(女子生徒)

ぐるぐるミーティングや花はじきを使う参加型学習は生徒の満足度も高かった。ユネスコ「21世紀教育国際委員会」報告書「学習：秘められた宝」でも、「学習の4つの柱」の一つである「他者と共に生きることを学ぶ」学習形態こそ、今日の教育にとって最重要課題の一つである、と強調されている。今回の研究でも高校生同士が TPP について話したり友達から聞くことで、関心が深まり生徒達のコミュニケーションスキルや調整力が補われ、さらに「他者と共に生きることを学ぶ」ことにつながっていくと



考えている。

授業では、自分とは異なる価値観・意見を排除するという否定的な対処の仕方ではなく、自分の見方を広げてくれる貴重な意見として耳を傾け、尊重するという肯定的な対処の仕方を体験できるように心がけている。

授業を通して生徒達は TPP について、いろいろな立場があり、様々な考えがあることを知っていく。TV や新聞などで報道されていることが自分たちの生活とどう関わっているのか関心を持たせることができた。

生徒の中にはグローバル化が進行することで国家間の格差が進行する可能性があることを指摘するものも複数名いた。

自国の損得ばかりを議論するのではなく、真にグローバルな視点とはこうあるべきなのだろうと生徒から学ぶことができた。

5 まとめと今後の課題

生徒達は TPP について立場の違いによる意見を理解し、TPP について報道されていることが自分たちの生活とどう関わっているのか多面的に考えることができるようになった。花はじきを使用することで一人ひとりの価値基準を可視化することができ、自分と他者との価値基準の比較ができた。さらに重み付けを加えた意思表示をすることで自分の中の価値基準と丁寧に向き合う時間を作ることができた。

また、参加型の授業では教師に生徒を観察する余裕が生まれ、観点別評価をつける時間を確保することができた。

食料主権の重要性や ISD 条項等さらに深めたいテーマはあるが、世界のグローバル化が加速する中で、消費者として倫理的な消費行動とはどうあるべきかを考えさせる実践としてはまだまだ不十分である。

今後、より効果的な授業ができるよう研究し、実践へとつなげていきたいと考えている。

〈参考文献〉

天城勲（翻訳）（1997）『学習：秘められた宝』ユネスコ ぎょうせい

鈴木 宣弘（2013）『TPP で暮らしはどうなる？』岩波ブックレット

日本消費者連盟（編集）（2005）『食料主権』緑風出版

※この指導実践事例は龍谷大学附属平安中学高等学校研究論集第 46 号より抜粋したものである。